

氏名(本籍)	たか はし ひろ おみ 高橋弘臣(千葉県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1,049号
学位授与年月日	平成7年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	元朝通貨政策成立過程の研究
主査	筑波大学教授 文学博士 片岡一忠
副査	筑波大学教授 岩崎宏之
副査	筑波大学教授 大藪正哉
副査	筑波大学助教授 文学博士 佐藤文俊
副査	筑波大学教授 経済学博士 小松聰

## 論文の要旨

本論文は、中国史上はじめて紙幣を専一とした元朝の通貨政策について、その成立過程とそれをふまえた旧南宋領への政策の拡大との二段階にわけ、宋・金代の通貨事情を視野に入れて考察した研究である。序論、結論と八章、文献目録から構成されている。

「序論」では、元朝の通貨制度・政策をその時代独自のものとして位置づけるだけでなく、前代すなわち宋・金代からの継承といった側面に注意し、紙幣を専一に使用した元代を中国貨幣史上の変革期と把握し、その歴史的意義の解明を提起している。

第一章「唐宋時代における手形の盛行と紙幣の出現」は、唐・宋(北宋)時代に出現した、手形「会子」について、その社会的経済的背景を考察し、商品流通の活発化と銅銭輸送の増大が主要原因であるとなし、政府が手形使用に関わることから、そこに紙幣への萌芽をみることができるとする。

第二章「金代における紙幣の発行と増発の経過」では、北宋領土の北半分を支配した金朝の通貨政策について、通貨不足の中で起こった内政支出の増大を賄うために、政府自らが発行し、民間において交換要具としても使われていた手形「交鈔」を支払いに転用し、通貨不足を補おうとした。その交鈔が支出転用後、各種貨幣機能を獲得して貨幣として使用されるにいたった過程を明らかにする。さらに、政府が交鈔の信用を維持するために強制通用力を付与するとともに、徴税による交鈔回収を強化する一方、それまでの主要貨幣である銅銭の使用を制限したため、交鈔の流通を地域的にも、使用階層の面でも拡大していき、交鈔が銅銭に代わって主要貨幣となった過程をあきらかにしている。

第三章「金末のモンゴル軍侵攻と通貨の混乱」では金代末期の紙幣の状況を考察する。モンゴル族

の侵攻に直面した金朝政府は、軍事費支払いに便宜をはかるため、紙幣印造権を地方の軍事機関に与えた。その結果紙幣は濫造・濫発され、その価値を暴落させ、紙屑と化した。一方、銅銭は政府の銅銭禁止もあって、その絶対量を激減しており、紙幣に代わって通貨の位置にもどすことは不可能であった。そこで通貨不足を補填する形で新たに銀の貨幣的使用が進んでいったことを説いている。

第四章「フビライの即位と中統鈔の発行」は、本研究の核心部分といってよい。ここでは、中国華北を支配下に置いた元朝が、前代までに貨幣的機能を付与された銅銭、紙幣（交鈔）、そして銀の三つのなかから、なぜ紙幣を通貨として採用したか、について考察する。華北を支配下に置く以前に、モンゴル族のモンゴル帝国は、イスラム世界と交易関係を持ち、その支払いのために銀を必要としていた。いまモンゴル帝国から分離・独立し、華北を支配した元朝は、華北を対象に大量の通貨を発行・流通させなければならなかったが、それ自体貴金属として価値をもつ銀は、イスラム圏との交易の支払い用貨幣として必要であり、華北で発行することはできなかった。また発行者が価値を設定でき、流通機能も備えている銅銭は必要絶対量を欠いており、対南宋戦のため莫大な経費を要する鑄銭もできなかった。そこで元朝政府は金代における紙幣使用の発達を念頭に紙幣「中純鈔」を発行した。銅銭を発行し紙幣と併用する計画もあったが、結果的には発行せずに、紙幣運用・管理体制の徹底を図ることで、紙幣「中統鈔」を専一に使用する、元朝の統一通貨体制が確立したのである。

第五章「南宋江南における銭会中半制の崩壊と東南会子の主要貨幣化」、第六章「江北における鉄銭化政策の失敗と紙幣の主要貨幣化」、第七章「四川における鉄銭の減少と紙幣の主要貨幣化」の三章は、元朝の通貨政策の旧南宋領への拡大の前提として、南宋時代に、南宋政府が発行した紙幣「会子」がどのように運用されたかを、江南・江北・四川の三地域に分けて考察する。豊富な史料分析をふまえ、三地域ではほぼ銅銭・鉄銭に代わって紙幣（会子、銭引）が主要貨幣の地位を占めていたことを明らかにした。

第八章「元朝の南宋併合と通貨政策の拡大」は、元朝の通貨政策の第二段階である、旧南宋領への拡大過程をみる。元朝は前代の紙幣使用の発達を基盤に、旧南宋領の金・銀を中央（大都）に集め、その一方、中央から南に帰る商人に対し、紙幣を利用させることで、金・銀の中央集中と紙幣の旧南宋領への拡大を図った。しかし、華北と異なり、元朝の旧南宋領支配が脆弱のため、紙幣は強制通用力を持たず、元朝は紙幣を専一に使用させる政策を貫徹できなかったとする。

「結論」では、紙幣を専一に使用させる元朝の通貨政策は元代に至って突如出現したものではない。唐宋時代の会子の使用、直接的には金代の交鈔の発行・流通が、元朝の通貨政策の前提となったのである。紙幣の発行は軍事的・財政的な必要性から権力によって強制的に行われ、その流通も権力の強制通用力なしには不可能であった。元朝の紙幣発行と全国的流通はまさにその運用管理体制が徹底していたからである。さらに、元朝の通貨政策の意義として、紙幣を全国的通貨として流通範囲を上げ流通機能を高めたこと、前代の分裂した通貨を統一したこと、銅銭使用にみられた鑄造・銭荒といった困難から解放したこと、元朝の通貨政策を通じて銀の貨幣的使用を高め、次の時代の主要貨幣としての地位を準備させたこと等を挙げている。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、従来本格的研究のないまま、概略的にしか言及されることのなかったテーマにはじめて取り組んだ意欲的な研究である。その評価すべき点は、第一に、従来元朝の通貨政策の具体的内容や崩壊過程については多くの先行研究がみられたが、その政策の成立過程については今まで注意を払われてこなかった。本研究によって、元朝通貨政策の全体像がはじめて明らかにされた点で、意義ある研究であるといえる。第二に、紙幣の使用を時代を遡って追求し、元朝の通貨政策の背景を解明し、中国貨幣史という通時的研究のなかに位置づける作業を試みた点で評価できる。元朝の政策を殊更に強調するのではなく、前代からの政策の継承面から把握したことは注目すべき成果である。第三に、本研究の主要部分である、金朝の通貨政策（第二章）、元朝の紙幣発行の政策決定（第四章）の分析は、先行研究を批判的に検討しつつ文集等の未使用文献を利用して、説得力のある論を展開している。ここでは、紙幣専一か銅銭との併用かの政策決定に大きな影響を与えた胡祇逵の上奏文の分析等にみられるいくつかの新知見も提示されている。第四に、方法論的には、従来当該時代の社会経済的進展を踏まえてもっぱら流通手段の機能としてしか捉えられていなかった貨幣を、貨幣のもつ諸機能を歴史現象のなかに適応させて論を展開して新しい境地を開いたといえる。

しかし、史料の多寡に起因するとおもわれるが、論述にやや疎密がみられるのが惜まれる。この点は一工夫があってしかるべきであろう。貨幣論を各所で展開した点は評価できるが、論の展開からいってさらに詳細な解説と用語の使用の慎重さ・適確さが求められる。さらに、モンゴル族の王朝としての元朝の特徴といった視点の導入と、それと関連して西アジア・イスラム圏との交易関係について考察の深化が、今後の研究として望まれる。

本論文は、残された問題があるにしても、未開拓の分野に果敢に取り組み、はじめに設定された問題点を実証的な考察によってほぼ解明しており、博士論文として十分独創性があり、学界への貢献が大いにありと認められるところである。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。